

最後の大会

一宮中・3 大高 紗來

私が三歳の頃から習っていたピアノをやめたいと言った時は誰もが驚いた。毎日こつこつ練習をし、学校の学習発表会の合唱で伴奏を弾いたり、コンクールで賞を取ったりしたこともあった。だが、練習のつらさに耐えられなかった。小学五年生だった私はがんで聞く耳を持たず、その時関心があった卓球を始めた。

「こんなはずじゃなかったのに」

卓球を習い始めて一か月。後悔が私を襲った。急に始めて上手くできるわけもなく、強い人ばかりでつまらなかった。毎週基礎、基礎、基礎。何度もやめたいと思った。何度もピアノに戻りたいと思った。でも始めたばかりでやめさせてもらえなかった。

数か月がたち、自分でも分かるほど上達した。まだ通っている教室の中では一番弱いが、今まで一度も勝てなかった父に勝ててうれしかった。強くなるたび、どんどん卓球が好きになっていった。

「中学生になったら絶対卓球部に入るぞ」

部活動がなかった小学生の時は秘密の特訓をしているみたいでわくわくした。

待ちに待った中学校生活が始まると私は迷うことなく卓球部に入部した。最初は順調で、みんなからたくさんほめてもらえたし、たまに先輩にも勝つことができた。三年生が引退して間もなく、初めての大会に出場した。トーナメント式の大会で、一試合目は緊張で震えが止まらなかった。それでもなんとか勝ち進み、優勝することができた。

「今まで頑張ってきてよかった」
それから練習の日々が続いた。

「痛っ」

二年の四月、思いがけないアクシデントが起こった。練習中に薬指を台にぶつけてしまったのだ。はじめは大したことないと思っていたが痛みが全くおさまらず、病院へ行くと骨折と診断された。もちろん卓球は禁止。三月から新たに塾を始め習い事が週五になっており、寝不足が続いていたため習っていた卓球もやめることになった。みんなが卓球しているところを見るとどうしてもやりたくて、左手でやってみたこともあるができなかった。一度卓球から離れることで改めてその楽しさを実感した。

包帯が外れ、再び卓球をしてもいいと言われると飛び上がるほどうれしかった。しかし、久しぶりで思うように手が動かず悔しかった。この後にあつた三年生の最後の大会の団体戦では惜しくも勝つことができず、引退してしまった。こうして私たちの年は終わった。

私はみんなに押されて部長になった。部長の仕事は思っていたよりかなり大変だった。後輩への指導、練習メニューの指示……。あまりみんなの前に立つ仕事をすることがなく、本当に私でよかったか不安になることもあった。練習がつかかったことも、試合で負けて自信を失くしてしまうこともあった。それでもみんなまで支え合い、私たちは着実に成長することができた。

「絶対勝つぞー！」

「おー!!」

円陣を組み会場で響き渡るような声を出して迎えた中学校生活最後の大会。一日目は団体戦で、シングルス四人、ダブルス一組の内三本取ることができた学校の勝ち。市内の中学校十校中四校が東三大会に出場できる。最初の中学校との試合では私はシングルスに出た。個人戦とは違い、負けるとみんなに迷惑がかかってしまうのでプレッシャーが大きかった。

「がんばれー！」

「ファイト！」

みんなの声を背中に相手への攻撃を始める。少しでも気を抜くと点をとられてしまいそう。足がすくむ。今までの練習を生かし全力でぶつかつた。しかし、ブランクもあつてか身体がいうことを聞かない。

「最後の大会なのに」

弱い自分が悔しい。もつと強かつたら。もつと頼りがいのある部長だつたら。そんな考えが頭をよぎる。いや、弱気になつちやだめだ。

「今」本気を出さないと。

「あ……」

気づいたら最後の一点を取られていた。結果は三セット対一セットで私の負け。信じられなかつた。一瞬だつた。どのセットもあと少して勝つたのに。私のせいで負けてしまうのではないかと考えると自然に涙が出てきた。だめだ。泣くな。必死に涙をこらえ、まだ続いている子の試合を見るとみんな勝つてそうだつた。

「え、すごい……」

ふと目が合うとニコッとほほえんでくれた。まるで安心させてくれているみたいで。そうだ。私には仲間がいるんだ。負けた後は全力で応援に徹した。そして、みんなのおかげで勝つことができた。その後負けることもあつたが順調に勝ち、四位で東三大会への出場が決定した。

それから一か月がたち、東三大会の日がやってきた。各市の上位校が集まっていると考えると緊張はいつもの比ではなかつた。今回はトーナメント式で、負けたら即終了。私はダブルスに出ることになった。豊川市で四位だつた私たちは一試合目から豊橋市の一位と当たってしまった。

「絶対強いじゃん」

「さすがに勝てないよお」

みんなも不安そうだった。そんな中、試合が始まった。

はじめは互角に思える試合運びだつたが、結果は一步及ばず。東三大会は初戦での敗退という結果だつた。

それでも私たちは、互いをたたえ合い、今日まで共に支え合いながら戦うことができた喜びをかみしめていた。

私は卓球部が大好きだ。もうやめたいと思つたこともあつた。それでもみんなで支え合い、時には悲しみ、笑い合う。そんな雰囲気が好きだつた。入部してから誰一人欠けることなく行けた東三大会は私の最高の思い出だ。